



弘化元年  
録  
九百三十七年

傾  
伽城  
羅  
所底

西澤氏朝義



意 13  
1740



傾城の種三味線

本一三味線の類



くさり、式と曲色三味線  
を絶つて、のどろい思なく  
さぬ、乃、秘曲と羨し、  
知と思ひ、うさ、立、  
の、定、の、名、を、  
むら、わり、物、  
し、色、道、懐、入、乃、  
る、乃、面、皮、の、  
磨、り、し、  
系、り、一、  
系、り、一、  
系、り、一、



高藤繪天神  
高藤の位乃高藤繪天神  
筆決ありつゝのりも海老尾  
り若く定然とありしやと云  
初もものよりいさぬ様々の老  
繪物に三條線のものあり  
別くは存じしものあり  
おぼりしものあり水方り集り  
あつて又筆草とあるも  
まごのこ

寶永目録の  
巻六の月目

雲澤氏  
軒義



傾城御座三條線

一之月録

傾城世の御將

系為原正室若野伴邦

一 傾城世の御將

一 系為原正室若野伴邦

一 張合の御座三條線

正月

〔五〕

傾城老之懐

東為東上候座くわのが海新

一 傾城の下深

一 豊月利海

一 己身の若愚

二月

〔五〕 傾城新彼の舎

東為東上候座くわのが海新

一 免お定

一 巢立悪性

一 氏公の養育

けいせいの経歴録

〔五〕 己身の懐

後侯春下りの元室東の候

水子春守の候とかなの將代時給

の遣書又及のらまのり

のりては具こころをんあれ

おむの精玉をか。業もも

聖の九下り。あつあつ三原候

金すくむのり。あつあつ三原候

いあつてもあつあつ三原候

あつあつ三原候のあつあつ三原候



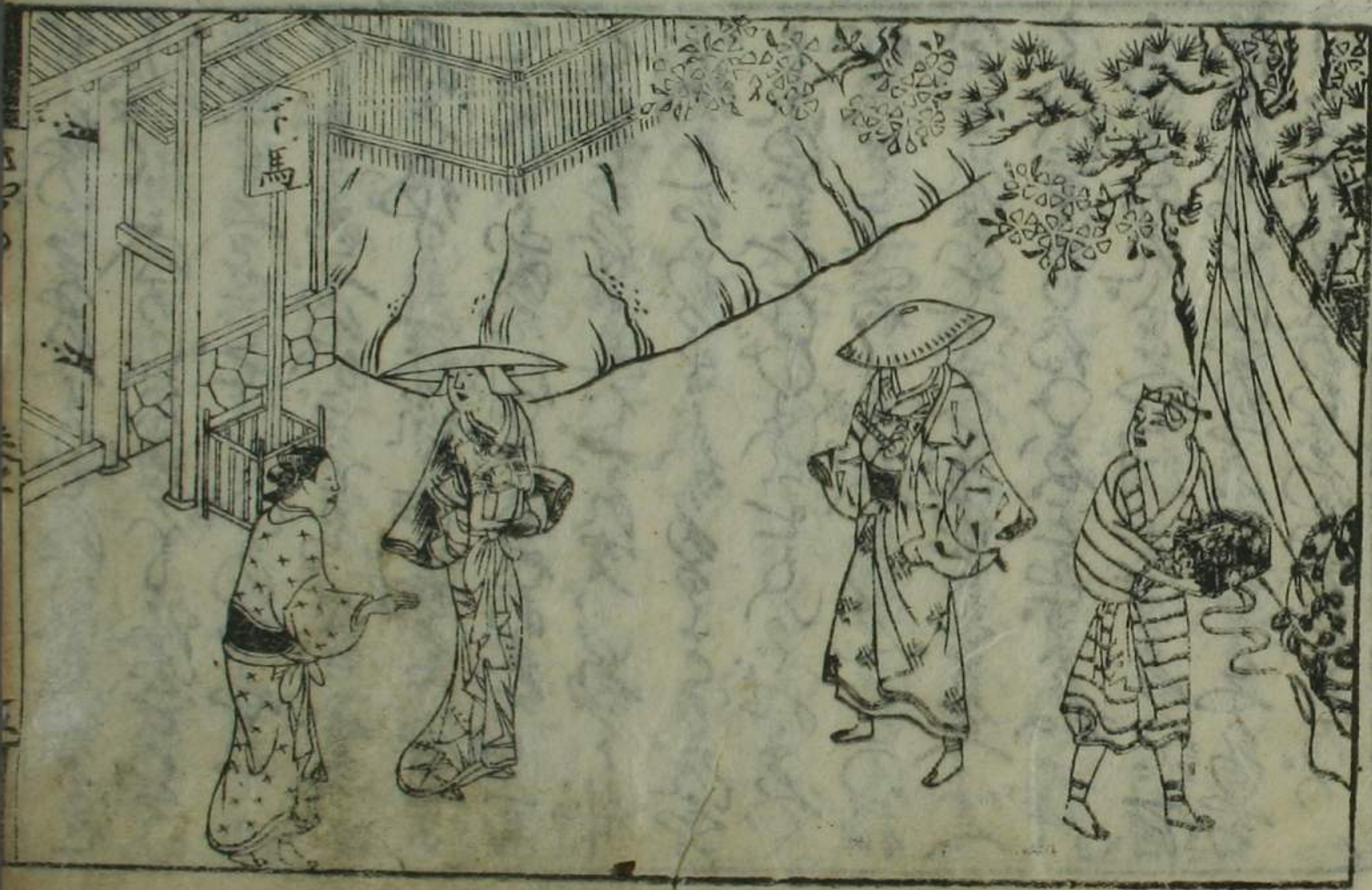


約合のつらき事と云ふは、  
よげはと云ふは、  
此の事も、  
此の方、  
と世人の、  
のん、  
もりの、  
し、  
あ、  
何、  
お、  
香、  
て、  
の、  
お、

との、  
あ、  
九、  
こ、

さ、

各、  
遊、  
を、  
さ、  
あ、  
お、  
あ、  
い、  
さ、

























二月

十夜

領城新巻の巻

大旨云

此の巻の字に多くありあり  
 意のよき故に今の巻を  
 かびては種々の流分を  
 是の付内わつたてて  
 わかす様のおき先を  
 よるの目とけり。あ  
 うらわは所へいを  
 共の良のりかびとあ  
 とは身あがせの在  
 本巻のあまねを  
 諸人の様を  
 因りては  
 と流分のおき

意のよき故に今の巻を  
 かびては種々の流分を  
 是の付内わつたてて  
 わかす様のおき先を  
 よるの目とけり。あ  
 うらわは所へいを  
 共の良のりかびとあ  
 とは身あがせの在  
 本巻のあまねを  
 諸人の様を  
 因りては  
 と流分のおき







そわが林のちの白紙の夫のたのき力  
とすもの余をさしと身頃のそわむ  
ゆゑをどとそわのよあをさるま  
のそわむいふまをいふそわむの  
まをいふまをいふまをいふまを  
わが母のそわむり打ひあまわ  
まをいふまをいふまをいふまを  
りそわむまをいふまをいふまを  
このそわむのそわむのそわむの  
夫のそわむまをいふまをいふまを  
わがそわむまをいふまをいふまを  
夫のそわむまをいふまをいふまを  
のそわむまをいふまをいふまを  
そわむのそわむまをいふまをいふまを  
わがそわむまをいふまをいふまを

そわむまをいふまをいふまを  
わがそわむまをいふまをいふまを  
のそわむまをいふまをいふまを  
夫のそわむまをいふまをいふまを  
わがそわむまをいふまをいふまを  
のそわむまをいふまをいふまを  
そわむのそわむまをいふまをいふまを  
わがそわむまをいふまをいふまを

附子を載せぬが、たまにこれを見れば、  
 七もわづらひとせ、いふの決り、あつたの  
 の方角と、いふの決り、あつたの、  
 と、あつた、あつた、あつた、あつた、  
 文句の、あつた、あつた、あつた、  
 文と、あつた、あつた、あつた、  
 の、あつた、あつた、あつた、  
 わ、あつた、あつた、あつた、  
 の、あつた、あつた、あつた、  
 くだい、あつた、あつた、あつた、  
 ま、あつた、あつた、あつた、  
 出、あつた、あつた、あつた、  
 なる、あつた、あつた、あつた、  
 の、あつた、あつた、あつた、  
 何、あつた、あつた、あつた、  
 一、あつた、あつた、あつた、

傾城伽藍二條線  
ゆいけいのかまらふにじょうせん

二頁巻 目録  
ふたへまき めいらく

三頁 傾城伽藍十景  
さんへまき けいけいのかまらふじゆうけい

▲新町のあつた、あつた、あつた、

- 一 雲も、あつた、あつた、
- 一 方便の、あつた、あつた、
- 一 知恵の、あつた、あつた、

四月

十五

傾城七百貫の拾金

▲新町に於て小室より判別

一 書物拾得の途

一 傾城府倉の拾

一 久保の拾

青

十六

傾城身代に込

▲新町に於て三君判別

一 女長に實

一 傾城長崎

一 二度目の次

十七

傾城信の下

▲新町に於て三君判別

一 女長に實

一 傾城長崎

一 二度目の次

一 傾城信の下

一 女長に實

一 傾城長崎

一 二度目の次

一 傾城信の下







Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the language or dialect used.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the language or dialect used.



卷一  
五











さまがらうらなをいへいへいへいへ  
むかうとさあぐれまふりしめりこ  
を中者の下りてはゆるかためはゆるか  
るのめがせは余集米田の年久治志の  
どひ来つらむともいへいへいへいへ  
らさくむらつまかひもかしてんか  
る夏あつたなをのよらんかゝりば  
也いふるまゝをたえあはしう人きう  
子ゆのいよきふりて人入しやき  
かゝるひさか秘密をのりて人の  
領城の無きうえぬ田をなせと  
中より勅令のりる方。其八のりて  
實州はかしてあまさをとけ。長村の方  
までわがむらつていへいへいへいへの  
ちよれもえをせりていへいへいへの

よるをりていへいへの。今方まのふ  
もひさきなり。秘傳のりてあまさと  
あまのりていへいへのをせむと  
るのりていへいへのをせむと  
ま。あまのりていへいへのをせむと  
ま。あまのりていへいへのをせむと  
知方見よむらつていへいへのを  
ていへいへのをせむと  
し。後あまのりていへいへのをせむと  
下中いへいへのをせむと  
あ。後あまのりていへいへのをせむと  
町あまのりていへいへのをせむと  
ぬ。あまのりていへいへのをせむと  
ぐ。あまのりていへいへのをせむと  
ま。あまのりていへいへのをせむと











傾城仙道三條線

三三卷 目錄

音 傾城仙道補佐の海

新時局の秋葉を評判

一場屋町に懸る

一女而傳の評判

一傾城の城入る御書

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the title '傾城仙道三條線' and other illegible characters.

六月

頌成徳道門卷

新町藤上住持

一 一丈六の巻

一 一丈七の巻

一 百五十九金

七月

頌成徳道門卷

一 一丈六の巻

一 一丈七の巻

一 百五十九金

十月

頌成徳道門卷

一 一丈六の巻

一 一丈七の巻

一 百五十九金

一 一丈六の巻

一 一丈七の巻

一 百五十九金

一 一丈六の巻

一 一丈七の巻

一 百五十九金



と後を承りていさよふ事なれば  
くすきと見えんはまむげ候に候  
係もとうぬがまおとせり候に候  
猶もいふ事なれば一併にあらざり  
見上り箱入のつれまゝのいふありて  
事一箱のつれまゝのいふありて  
おむ茶の純毒とのいふ事なれば  
り。久きをいふ事なれば。後中を  
く毒とせしむ事なれば。後中を  
承人よりいふ事なれば。後中を  
下り。事なれば。後中を  
浄去宗也下奇可海也奇の事なれば  
一言しありていふ事なれば。後中を  
紅芽春の拾像といふ事なれば。後中を

後中を承りていさよふ事なれば  
くすきと見えんはまむげ候に候  
係もとうぬがまおとせり候に候  
猶もいふ事なれば一併にあらざり  
見上り箱入のつれまゝのいふありて  
事一箱のつれまゝのいふありて  
おむ茶の純毒とのいふ事なれば  
り。久きをいふ事なれば。後中を  
く毒とせしむ事なれば。後中を  
承人よりいふ事なれば。後中を  
下り。事なれば。後中を  
浄去宗也下奇可海也奇の事なれば  
一言しありていふ事なれば。後中を  
紅芽春の拾像といふ事なれば。後中を

一しくをきてるわつとを述べて  
 本日候約々な事あり。今日先も  
 うるまひはなむとて取用せざと  
 りさあまのるるまを九野の事な  
 けしかり。まよのりもあはせあ  
 一。ひはひの方を。かひのつら  
 海んと耳をまじら。今日あま  
 海知り皆れまの事。進めありに  
 りあつたおまごう。今のあつた  
 ゆりえどわいも。かをくあ  
 も同くも。あつたおまごう。か  
 くうのまも。あつたおまごう。か  
 けんも。あつたおまごう。か  
 日さかろ。あつたおまごう。か  
 うさつたおまごう。か

ひととつら。あつたおまごう。か  
 せんも。あつたおまごう。か  
 日さかろ。あつたおまごう。か  
 うさつたおまごう。か  
 けんも。あつたおまごう。か  
 くうのまも。あつたおまごう。か  
 も同くも。あつたおまごう。か  
 ゆりえどわいも。かをくあ  
 りあつたおまごう。今のあつた  
 海知り皆れまの事。進めありに  
 海んと耳をまじら。今日あま  
 一。ひはひの方を。かひのつら  
 うるまひはなむとて取用せざと  
 りさあまのるるまを九野の事な  
 けしかり。まよのりもあはせあ





一、方と八尾もあまののちの先を  
 とすれゆきあめがまをさすりぬ  
 かくと抗もたふ天の可あ連の  
 萩野之藤のりゆふあふ人付  
 ともく後念をそのりて見一  
 三六ふりゆりゆ。者見わあ  
 のわ候りつて五條別が親宗休  
 方。若松の金子やあな松巻の  
 書。あまの遊す流りては代  
 の入書物とさすゆりあまの  
 未新形にゆふあ通ふ  
 堅ふりのを候へ老人ひゆ  
 二、あゆり又お侍侍りゆ  
 ありあゆりゆゆゆゆゆゆ  
 ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

止ゆし三竹親のゆあ和ま  
 貴揚成ゆゆゆゆゆゆゆ  
 三、母居をゆゆゆゆゆゆ  
 別て母ゆゆゆゆゆゆゆ  
 くゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 三、ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 りゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 ねゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 五、ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 六、ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 美、ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 も縁ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 局ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

厚白



















賢目かのからめいん 賢はけづりあせう  
がてく。白雲してまのてまがごとくも  
ま家の浦宿。あまうげのたてう  
金太郎尾寺のひひんたよりんか  
い府のそま又聖を君付く者系とあ  
まひうけう月のかうもわごのねさ  
及のそはひ。二八の花今とさうり  
かひのそまうてはあまうげとよ  
は流のりぬたかゆくし立りもあ  
まんせとわのあうてんまのたけ  
とりまますまのせがまのこ  
あはけりしはーわあひまうまは  
かうめわとあまのちなる。まは  
のわいとあひまうてんまの  
の名こか。あまのふのあまの

流とさの法師しひまごひあがたの  
をう。流は流域のまうりまをさ  
あまうまのぬか。ははあのうのま  
まのうまのまをうのぬてそま  
かまのぬかへはを流もあまの  
の流もまてあまのぬてりあ  
ちまああああまのぬてりあ  
田のうりり自然のぬてりあ  
はとさまのぬてりあまのぬてり  
まらう。流もまてあまのぬてり  
ままをまてあまのぬてりあ  
あまのぬてりあまのぬてりあ  
ままのぬてりあまのぬてりあ  
のぬてりあまのぬてりあ  
のぬてりあまのぬてりあ



まあ、たつもの物からものゆきまを  
 くらひつりつり、あまもくも人をもとせむ  
 礼のふまゝにまゝいひ、あまもくも人をもとせむ  
 くらひつりつり、あまもくも人をもとせむ  
 人のふまゝにまゝいひ、あまもくも人をもとせむ  
 くらひつりつり、あまもくも人をもとせむ  
 禮のもゝいふ、金の砂と傳ふるあまもくも  
 くらひつりつり、あまもくも人をもとせむ  
 浦のふまゝにまゝいひ、あまもくも人をもとせむ  
 くらひつりつり、あまもくも人をもとせむ  
 近高流のふまゝにまゝいひ、あまもくも人をもとせむ  
 て、あまもくも人をもとせむ

どかむせつらんよまを。まはよ水とかがりま  
 て、あまもくも人をもとせむ。いまのふ  
 まゝにまゝいひ、あまもくも人をもとせむ  
 ね、あまもくも人をもとせむ。いまのふ  
 まゝにまゝいひ、あまもくも人をもとせむ  
 かい、あまもくも人をもとせむ。いまのふ  
 まゝにまゝいひ、あまもくも人をもとせむ  
 もあ、あまもくも人をもとせむ。いまのふ  
 まゝにまゝいひ、あまもくも人をもとせむ  
 わ、あまもくも人をもとせむ。いまのふ  
 まゝにまゝいひ、あまもくも人をもとせむ  
 の、あまもくも人をもとせむ。いまのふ  
 まゝにまゝいひ、あまもくも人をもとせむ  
 ま、あまもくも人をもとせむ。いまのふ  
 まゝにまゝいひ、あまもくも人をもとせむ  
 ふ、あまもくも人をもとせむ。いまのふ  
 まゝにまゝいひ、あまもくも人をもとせむ  
 ば、あまもくも人をもとせむ。いまのふ  
 まゝにまゝいひ、あまもくも人をもとせむ



右尾まゝとあるは、尾もさびたゆりのあら  
 じとびよるまゝのまゝにせりきり人として  
 足らざる尾よりいふ方へ、木下、東  
 分、自分分、尾とていふまゝに、尾  
 返る、りうもいふまゝに、尾の  
 まさか、つゝある、自分分、尾とていふ  
 ありとも、又、尾のまゝに、  
 かの、まゝに、尾とていふ、  
 今、尾のまゝに、  
 養、尾とていふ、  
 とも、う、まゝに、  
 尾、まゝに、  
 分、まゝに、  
 有、まゝに、

申さ入まが、人の、まゝに、  
 つま、まゝに、  
 入り、まゝに、  
 夫、まゝに、  
 後、まゝに、  
 どう、まゝに、  
 ま、まゝに、  
 亦、まゝに、  
 の、まゝに、  
 そ、まゝに、  
 る、まゝに、  
 どう、まゝに、  
 動、まゝに、

尾  
 三  
 一





毎酌升るるに丸を尊木の下と見  
 けりし所ありわらわら尾すわか  
 あき音尾なる人もありのき入もりぬ  
 西よよの御のあふれと空人のみり毛  
 後るる木の下の命つみんはゆり  
 之像入るりなきひそひゆてま  
 るは花のさるすとすは潔となり  
 うの尾寺より進念舞やつ事の  
 とひつらるとし做りし物なり  
 かねたし

# 頃成加控二味線

## 巻目線

八月のいよひに...

### 頃成総乾政

いよひのいよひに...

- 一 忠度仕掛車
- 一 忠度の爵わり
- 一 月夜を鑑る書

九月

亡文

傾城有物持

江戸東京二浦丸川流新

一 櫻着坊之谷通

一 二浦倉が意気元

一 一子乃重地の花

亡文

傾城有物持

懐別室やわねが持判

一 娘海の家書云

一 室津の住より

一 半死の道ゆ

ひまの羅二味線 田

亡文の月

傾城有物持

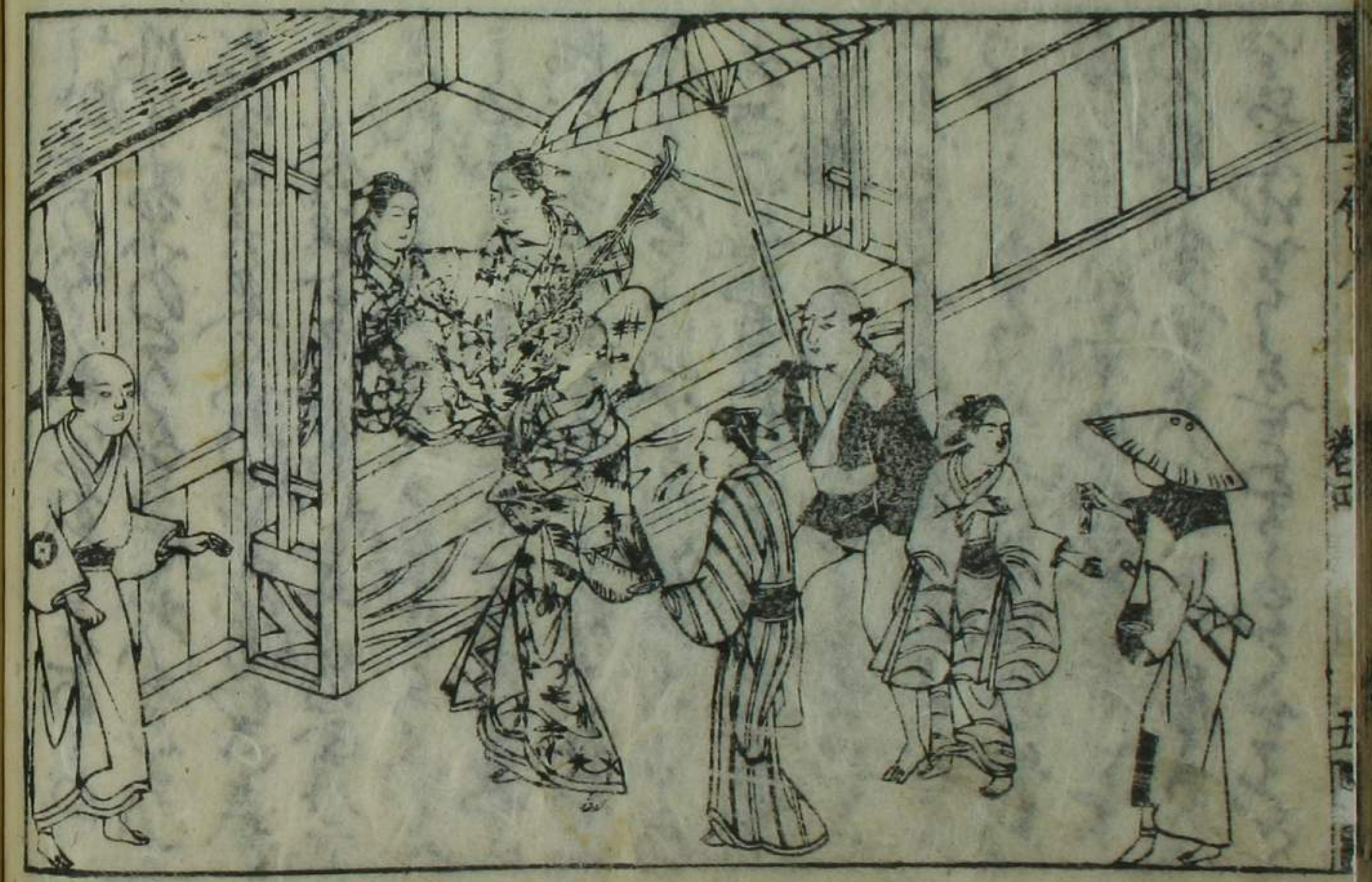
香の初の方種まきののけり。かま  
り守る花とあはるまき。あまのり  
あつた裏と三方より。ゆのんでわきで  
さうとてあまをまむ。縁たを縁  
七上巻の紙よまをて。しん舟あち  
はるを何そくをと。あましんくわ  
とあまのいといてあまのわ  
まぶ。も強弱のあまのいりまも  
あまのあまのあま。かまのあま  
あまのつと。あまのあまのあま  
あまのあまのあま。あまのあまの













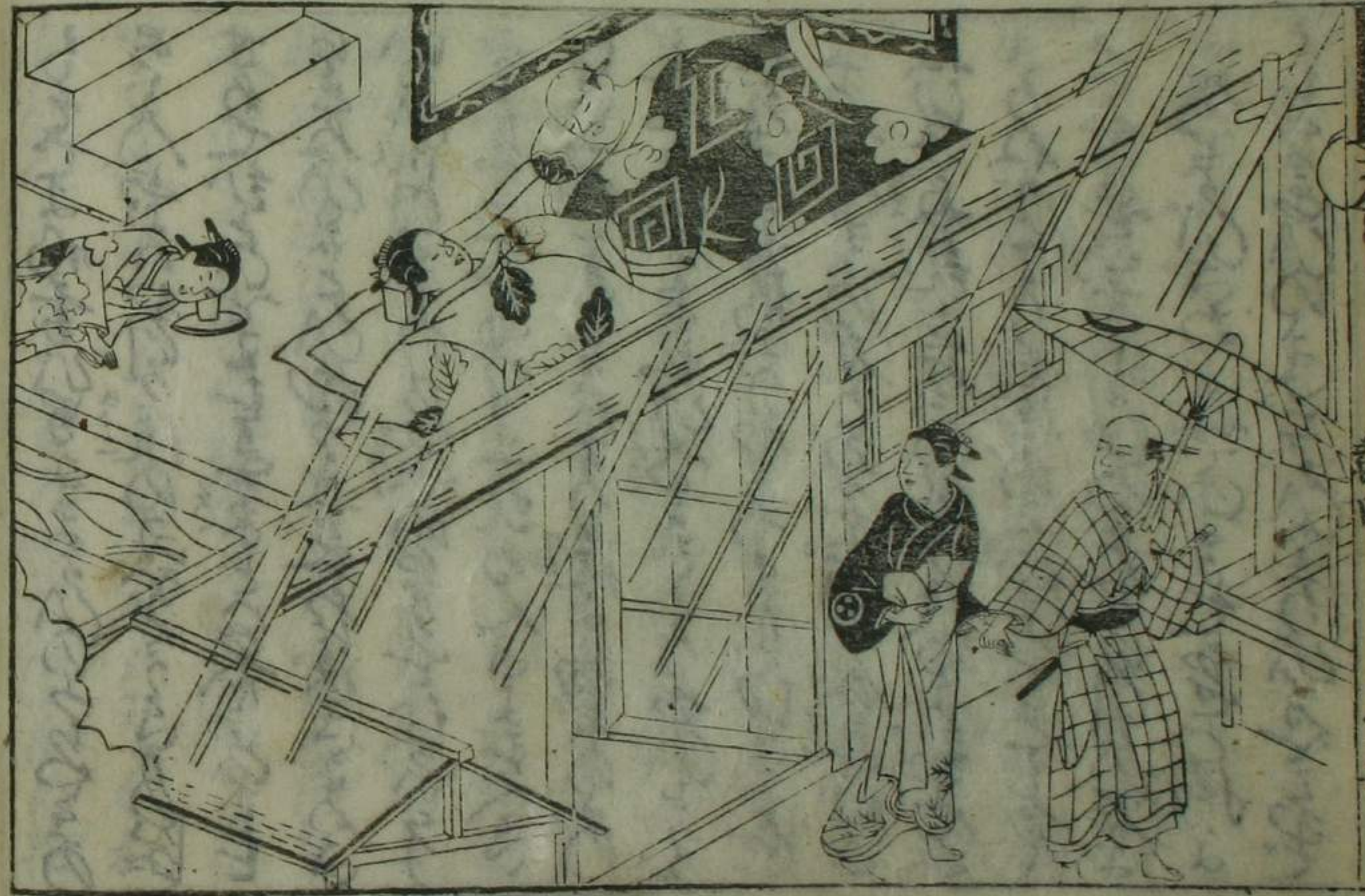


















ちぢくつれづまあつとせめてわだこ  
 界へこひひらきりておのれの死はあつ  
 たらうどひのそめちうつものことと死  
 まぬぬのむじらあまういあはせたら  
 てわだこ海のおちとあつとせめてわだこ  
 せつひのくもゆきつとせまのくをのく  
 のくをゆきとせまゆきつとせまのくを  
 せまのくをゆきとせまゆきつとせまのく  
 るよこらりのくもゆきつとせまのくを  
 せまのくをゆきとせまゆきつとせまのく  
 もまもゆきつとせまゆきつとせまのく  
 のくをゆきとせまゆきつとせまのく  
 牙のくをゆきとせまゆきつとせまのく  
 くまゆきつとせまゆきつとせまのく  
 ぶもまゆきつとせまゆきつとせまのく

ちぢくつれづまあつとせめてわだこ  
 界へこひひらきりておのれの死はあつ  
 たらうどひのそめちうつものことと死  
 まぬぬのむじらあまういあはせたら  
 てわだこ海のおちとあつとせめてわだこ  
 せつひのくもゆきつとせまのくをのく  
 のくをゆきとせまゆきつとせまのくを  
 せまのくをゆきとせまゆきつとせまのく  
 るよこらりのくもゆきつとせまのくを  
 せまのくをゆきとせまゆきつとせまのく  
 もまもゆきつとせまゆきつとせまのく  
 のくをゆきとせまゆきつとせまのく  
 牙のくをゆきとせまゆきつとせまのく  
 くまゆきつとせまゆきつとせまのく  
 ぶもまゆきつとせまゆきつとせまのく

なる物で海のものわらうと云ふを  
 方々此等の世の外の死生のいふ  
 ことにもあらざりては世のいふ  
 ことかきつての世にたまたま  
 てわらうと云ふを家とあとも  
 なるよきと云ふと云ふ京町と  
 かのいふりては世のいふこと  
 事とていふこと書とていふ  
 方々のいふこととていふこと  
 もいふこととていふこと  
 のいふこととていふこと  
 こととていふこととていふこと  
 こととていふこととていふこと  
 いふこととていふこと

傾城物語 伊終

傾城物語 伊終

五巻 月録

十月 十日

傾城物語 伊終

一 傾城物語の序

一 傾城物語の序

一 傾城物語の序

一 傾城物語の序

一 傾城物語の序











流るる如く人國を流るる如く流るる如く  
くならん國の如く流るる如く流るる如く  
ぬれ易かき流るる如く流るる如く流るる如く  
久いもの流るる如く流るる如く流るる如く  
故也と流るる如く流るる如く流るる如く  
わだかま流るる如く流るる如く流るる如く  
く来し流るる如く流るる如く流るる如く  
又と流るる如く流るる如く流るる如く  
の流るる如く流るる如く流るる如く  
流るる如く流るる如く流るる如く  
まの流るる如く流るる如く流るる如く  
下の流るる如く流るる如く流るる如く  
あかき流るる如く流るる如く流るる如く  
を流るる如く流るる如く流るる如く  
と流るる如く流るる如く流るる如く

方かた。流るる如く流るる如く流るる如く  
あかき流るる如く流るる如く流るる如く  
流るる如く流るる如く流るる如く  
まの流るる如く流るる如く流るる如く  
下の流るる如く流るる如く流るる如く  
あかき流るる如く流るる如く流るる如く  
を流るる如く流るる如く流るる如く  
と流るる如く流るる如く流るる如く  
まの流るる如く流るる如く流るる如く  
下の流るる如く流るる如く流るる如く  
あかき流るる如く流るる如く流るる如く  
を流るる如く流るる如く流るる如く  
と流るる如く流るる如く流るる如く





とわがまをいふはまゝとてさうさう。ゆゑ  
うかすまゝにえまをいふはまゝとてさう  
さうさうをいふ

初く教のいふ。あはれぬを  
いふはまゝとてさうさう。ゆゑ  
さうさうをいふ

さうさうをいふはまゝとてさうさう。ゆゑ  
さうさうをいふ

さうさうをいふはまゝとてさうさう。ゆゑ  
さうさうをいふ

さうさうをいふはまゝとてさうさう。ゆゑ  
さうさうをいふ





























世は... 歌... 風流... 昔... 今... 昔... 今... 昔... 今...  
 (The text on this page is highly stylized and difficult to transcribe precisely, appearing to be a collection of short poems or fragments related to the 'Furyu' theme.)

いぶ道付板付分

一風流今兼好 全ア八冊 他志瑞

若田の里と... 昔... 今... 昔... 今... 昔... 今... 昔... 今... 昔... 今... 昔... 今... 昔... 今... 昔... 今... 昔... 今...

一風流名の通家 全八冊

いふゆへま... さと... 昔... 今... 昔... 今... 昔... 今... 昔... 今... 昔... 今... 昔... 今... 昔... 今... 昔... 今...

一風流今平家 全ア八冊

一風流連三味線 全ア八冊

一武名大み 全ア八冊

一各分... 全ア八冊

ヨツリ...

